
スーパー口ポット大戦 the ZEXIS

踊るアゴ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパー口ボット大戦 the NEXIS

【Zコード】

Z0585V

【作者名】

踊るアゴ

【あらすじ】

次元の壁が壊れ、数多の世界が一つとなるとき、幾つかの秩序と法が生まれた。だが争いが消える事はなかつた。これは一つの世界の変革と、それにより数奇な運命と残酷な試練に巻き込まれた者達の物語である。

「プロローグ」（前書き）

この作品は、「第2次スーパー・ロボット大戦Ζ 破界編」の話や設定などを一部いじくっています。なのでそういうのが苦手な人はご注意ください。

「プロローグ」

・ある世界で一つの次元震が起きた。

それにより数多の並行世界の壁は壊れ、一つの世界となつた。「次元震動」と呼ばれし大災害が起きてから20年の間、幾つかの國家が生まれた。

だが20年たつた今でも、人々の世界から争いが消える事はなかつた。これはそんな歪み捩れた世界で苦悩や葛藤に悩みながらも、明日への希望のために抗い戦い続ける者達の物語である…

？？？「…」この世界でも人々は争い、憎しみや悲劇が繰り返されているか…ならば私がやるべき事はただ一つ、この世界もまた“箱”の管理をせねばならぬだろう…人類よ、いま一つの結末を知るときが来たのだ！！！フハハハハハ…！」

「プロローグ」（後書き）

初めまして、小説はほぼ初心者といつても過言ではありません。さらには世界観とか設定がもしかしたら滅茶苦茶になる可能性もあるかもしれません、もしそれでもいいという人はゆるくお付き合いください。

「100万Gの男」（前書き）

多元世界となつた一つの世界。その世界は大胆に言えば3つの国に分けられている。一つは世界の1／3を領土としている「ブリタニア・ユニオン」、中国大陆とロシアを中心とした「人革連」、スペインやフランスなどの中東の集合国際連合国家「AEU」である。その3つの国による冷戦状態が続いていた。今回はその中の一つ、ブリタニア・ユニオンでの話である。

「100万Gの男」

「ワシントン」

クロウ「金がない…本当にない…」

とそう嘆くこの長身の青年、名はクロウ・ブルーストという。なぜこの男がこんなに悩んでいるかといふと…

ゼニトリー「おい、とつと約束の100万G、早く払え！」

クロウの横で怒鳴り散らす坊主頭の中年は、借金取りのゼニトリーである。

クロウ「待て待て、すぐ仕事を見つけてちゃんと返すから。」

ゼニトリー「ふざけんな…こちとら待ちぼつけている暇はないんだ…今すぐ払えねえならこっちも強硬手段をとるぞ…！」

クロウ「おっと、俺は暴力には屈しない主義なんですね。」

ゼニトリー「キザな事を言つていい暇があつたらさつと金払え！」そう、彼は借金を返せず困っていたのだ。しかも100万Gと言えばこの世界では家一軒買える値段である。

だが一人がもめていた時、巨大な地響きが起きた。

ゼニトリー「うわっ！なつなんだ？」

クロウ「地震じゃねえな…おそらくどつかで誰かがドンパチやってんだろうな。」

ゼニトリー「マ、マジかよ…！」冗談じゃない…巻き込まれる前にトンズラだ！」

クロウ「…」

ゼニトリー「おつおい、何やつてんだよ？早く逃げねえと…」

クロウ「悪いな、俺は野暮用が出来た。」

ゼニトリー「おい！そつちは…」

なんと、クロウは騒動が起きている方に行つてしまつたのです。

そこでは、クロウの予測通り、とあるラボが襲撃にあつていた。

社員「チーフ！早く逃げましょ！」

トライア「冗談じゃないよ。この子を置いて行けないね。」

社員「し、しかし…」

トライア「せめてこの子を動かせたらね…」

クロウ「だつたら俺が動かしてやるよ。」

社員「なつ！誰だね君は！？」

トライア「ふーん、あんただつたら動かせるのかい？こいつを。」

クロウ「俺はできない事は言わない主義でね。」

トライア「OK。あんたの名前は？」

クロウ「俺はクロウ、クロウ・ブルーストだ。」

トライア「あたしはトライア・スコートだ。」

クロウ「さて、早速行くか、えーっと…」

トライア「試作機ナンバー0（ゼロ）だよ。」

クロウ「なんかその名前はちよつとなー。」

トライア「じゃああんたが決めてやりなよ。」

クロウ「そうだな。じゃあ行くか、“ブラスター”」

そして、一人の男の戦いが始まる…。

「100万Gの男」（後書き）

一様主人公は「破界編」の主人公、クロウです。とりあえずは此処までです。次回から戦闘になります。（修正）土地の場所を間違えてしまいました。ご迷惑をかけて申し訳ございません。

「W・L・F・～世界解放戦線～」（前書き）

トラブルに巻き込まれた借金男クロウ・ブルーストは、襲撃されているアクション財団のラボに向かう。そこでクロウはトライアが制作していた期待「ブラスター」に乗り込み、戦場へと向かつて行つた

「W・L・F・～世界解放戦線～」

「スコート・ラボ周辺」

WLF「我々は世界解放戦線、WLFである！・神聖なる志の元、戦争に補助するアクション財団を破壊する！無論、歯向かう者には容赦はせん！！」

そう叫び、アクション財団に攻撃を仕掛けているのは、ここ最近勢力や勢いが増している一段である。

彼らは戦争に手助けをする存在を徹底的に排除する、いわゆる過激なテロ組織なのである。

クロウ「そこまでにしな！」

彼らの眼に映つたのは、アクションで作られていた機体、ブラスターとそれに乗つたクロウである。

クロウ「お前らなあ、額に汗して働く事を覚えな。」

WLF「アクションの新型か！たつた一機に何ができる！？」

クロウ「10機か…あれはアクション財団で作られた量産型起動兵器“アクシオ”だな。」

敵は量産型の兵器、アクシオが10機である。

クロウ「だが、俺の敵じゃないな。悪いなブラスター、俺の操縦は半端ねえぞ。」

そう言つた刹那、ブラスターが装備していた0・ダンガンから放たれた銃撃によつて敵の機体は1機を残して殆ど撃墜されたのである。

WLF「ば、馬鹿な！！我らの精銳部隊が…！」

クロウ「さあ、これで最後だ！」

そう言つと、クロウはブラスターの盾を飛ばし、最後に残つていた敵の機体を真つ二つに切り倒し、戦いはブラスターの圧勝であった。クロウが出陣してわずか3分で片が付いてしまつたのである。

クロウ「ふう、これで終了つと…」

だがその時、異変が起きた。

クロウ「なんだ、このエネルギー反応は？」

トライア「クロウ！ その場を離れるんだよ！…」

クロウ「どうした？」

トライア「その周辺で次元震が発生する！…」

クロウ「何だつて！？」

次元震… それは次元の狭間で起きる一種の災害である。 次元震の大きさはその場に時空の歪みとなる“次元震動”から発生した土地が丸ごと移動してしまう“次元転移”まである。 そして今回起きた次元震は、かなり大きかった。

クロウ（やばいな…かなりデカイぞ）

しかしクロウ達の心配を余所に次元震はそのまま縮小していった。謎の怪物を残して…

クロウ「あれは…、次元獸…。」

「W・L・F・～世界解放戦線～」（後書き）

まずはW・L・F撃破です。戦闘シーンがあつとこづつ間に終わってしましました。戦闘シーンはかつこいけど描くのは難しいのですね。

「次元獣」（前書き）

クロウとブラスターの活躍でWLFを撃退に成功したが、突如起きた次元震によって招かざる客がやって来てしまったのであつた…

「次元獣」

クロウ「次元獣…、また厄介なもんが来やがつたぜ。」

次元獣…

それは何処からともなく次元の彼方から現れる恐竜の様な姿をした怪物である。

さらにその怪物は「ミュニケーション不可能で、現れると周りの物すべてを破壊する

「第一級危険災害」として扱われている。

クロウ「来ちまつたもんは仕方ねえ、早いとこ片付けるか！」

トライア「それなら好都合だ。」

クロウ「好都合？」

トライア「そいつの正式名は『対MD撃退用機動兵器 ナンバー0』つまりそいつは元々次元獣と戦うために作られた機体なのさ。」

クロウ「けどさつき見た限りじゃ少し力不足だが？」

トライア「そりやまだそいつの機動力を完全に出してないからさ。いまリミッターを解除するよ。」

そういうて解除ボタンを押した瞬間、ブラスターはとんでもないスピードで次元獣の所まで駆つっていたのである。

クロウ「うおあ！？」

トライア「どうだい、乗り心地の方は？」

クロウ「いやもうすげえな」については…。まあこれなら何とかはなりそうだな。」

トライア「じゃあ、期待してるよ。」

クロウ「つたく、しようがねえな。そいじゃ、いくぜブラスター！」

そしてそのまま次元獣の群れを次々と狩つていったのである。

しかし思つたより数は多く、リミッターを解除したブラスターでも苦戦を強いられてしまつていて。

クロウ「クソ…さすがにちと余裕ある。」

だがその時、謎の機体が現れたのです。

五飛「…………」

クロウ「なんだ、あの機体は？」

五飛「弱いな。」

クロウ「！」

五飛「だが無視はできん。行くぞナタク！正義に敗北は許されん！」

ナタクと呼ばれし機体が放つた火炎放射により、残りの次元獣達も業火に焼かれていったのであつた。

クロウ「す、すげえ……」

五飛「…………」

クロウ「いやあ、助かつたぜ。あんたは一体？」

だがクロウが聞く前に謎の機体は何処かに去つていったのであつた。

クロウ「礼も言わずか、まあいいか。」

トライア「お疲れさん、なかなかやるじゃない。」

クロウ「まあこれぐらいは朝飯前よ。」

トライア「ところでさつきの機体はあんたの知り合い？」

クロウ「いや、俺も始めて見たぜ。ありや一体……？」

トライア「まあこのご時世だからね、どつかで誰かが兵器を作つてもおかしくはないよ。」

クロウ「…………あのさあ」

トライア「なんだい？」

クロウ「こういつちや何だが、御礼を金に両替してくんねえか？」

トライア「はあ！？」

「次元獣」（後書き）

今日はガンダムWの五飛初登場です。

「動き始めた運命」（前書き）

スコート・ラボと周辺の町を襲撃したWLFと次元獣を撃破したクロウはラボに戻り、プラスタの開発責任者であるトライアに事情を説明するのであった。

「動き始めた運命」

トライア「なるほどね、それで急に金の話になつたんだね。」
クロウ「いやあ～、面倒ない。」

トライア「ほんとだよ。といいでこくらなんだい？あなたの借金。」

クロウ「100万G。」

トライア「あ！？100万！？まさかそれをあたしにせがもつとしたのかい？」

クロウ「ぶっちゃけて言えば…」

トライア「呆れた…とんだ守銭奴だよ。」

ゼニトリー「おい、兄ちゃん。」

クロウとトライアの会話に割り込んできたのは、クロウに借金の返済を迫っていた借金取りのゼニトリーだった。

クロウ「お、あんた無事だつたか。」

ゼニトリー「まあな、さつきは助かつたが。」

クロウ「おーじゅあ…」

ゼニトリー「言つとくが借金チャラは無しだからなー。」

クロウ「ちっ。」

ゼニトリー「とつあえずあんたにはPMCにでも入つてもいい。」

クロウ「PMCにか？」

PMC、早い話が民間の傭兵部隊である。

ゼニトリー「あんたの腕なら問題ないつで。」

トライア「ちよつと待ちな。」

ゼニトリー「何だよ姉ちゃん？」

トライア「ハイ、100万G。これでいいんだ。」

ゼニトリー「あらま、じつやまごビ。おい兄ちゃん、良い人に出会えたな。」

クロウ「なんだ、もう行くのか？」

ゼニトリー「金さえもらえりやもつあんたにちも用はないよ。」

クロウ「ちゅうと待つた！」

ゼニトニー「な、なんだよ。またか仕返しなんて言つてつもつじ……」

クロウ「達者でな、無事を祈つてゐるが。」

ゼニトリー「……へ、最後はかっこよく決めちひつてへれるじゅないの。」

そつと置いて、ゼニトリーはラボを後にしていくのである。

クロウ「ふつ、決まつたぜ」

トライア「何気取つてんだい、あたしが払つた分はちやこと返してもらひつからね！」

クロウ「えー、マジで。ただで払つてくれたんじや……」

トライア「ふざけんじやないよスット『アラシ』『イイ!』そんなうまい話があるか（怒）」

クロウ「……」もつともで……

トライア「とりあえずあんたにはこれから『ラスタ』のテストパイロットとしてみつかり働いてもらひつからね。」

クロウ「はーい。」

トライア「とりあえず、あんたは格闘と射撃、ビットが得意？」

クロウ「俺はどつちでもいけるが。」

トライア「OK、じゃあどつちの能力もあげておくね。」

しかし、クロウの借金返済生活が始まつたのである。

「動き始めた運命」（後書き）

第一章、完成です。

～クロウの現在借金は、現在100万G～

世界情勢（前書き）

クロウの初戦も無事に終え、一段落はついた、さて皆さんのこの世界の状況を、」説明しよう。

「Jの多元世界は時空変動からすでに20年が経過しており、日本列島と月（月と陰月）が2つずつ存在している。アフリカ大陸の一部と陰月は次元の歪みで侵入不可領域となつており、アフリカ大陸の一部は「暗黒大陸」と呼ばれている。世界は三大勢力と呼ばれる「ブリタニア・ユニオン」、「人類革新連盟（人革連）」、「AEU」の三大国にほぼ分割されており、宇宙にはコロニー群が存在するが、実質的にそれらも三大国の支配下にある。地球上には軌道工レベーターが3基建造されており、オービタルリングが地球を囲んでいる。アストラギウス銀河のギルガメス軍およびバララント軍・並行世界からの超長距離移民船「アイランド・1」は本編開始より2年前に発生した次元震で新たに地球圏に参入しており、ギルガメス軍・バララント軍は両軍とも傭兵集団に転身している。アイランド・1は1国家として正式な国家として認められる。よつて正式には4大国として分割されている。

4大勢力

ブリタニア・ユニオン

ブリタニア帝国とのユニオンが合併した、北米大陸を中心とする勢力。首都は帝都ペンドラゴン。元首はシャルル・ジ・ブリタニア皇帝が、首相をユニオンのブライアン・ステッグマイヤーが務めている。南東側の日本列島を含む16の国を「エリア」として支配している。ユニオン製MSとブリタニア製KMFで構成された軍隊を持つ。

エリア 11

南東側にある日本の名称。住民達は「イレヴン」としてブリタニア・ユニオンに虐げられている。数年前の次元震で参入したギルガ

メス軍が傭兵としてたむろしている。シンジユクゲットーでは、治安警察がレジスタンスの取り締まりを行っている。

人類革新連盟

通称「人革連」。ロシア、インドなどのアジアを中心とした勢力。中華連邦を内包しているものの、勢力内の足並みは揃っていない。人革連製MSと中華連邦製KMFで構成された軍隊を持つが、中華連邦製KMFはテロリストが主に使用するだけで、人革連としては殆ど使われていない。

AEU

ヨーロッパ勢力。ロームフェラ財団が存在し、ONを特殊部隊として抱える。AEUとONのMSで構成された軍隊を持つ。軍事面でのトップはトレーズ・クシリリナーダが務めている。

アイランド・1

船団住民の半数にあたる約500万人が生活する巨大居住艦。天窓式のドームに開閉式の防護シェルを持つ。その全長は約15kmと従来艦の約2.5倍に相当する。地上面からドーム最上部までの高さは約2,000m。構造材を軽量化するため、艦内的人工重力は0.75Gに設定されている。地表の居住区には港湾部・市街地・丘陵地帯などがあり、地下には歓楽街や物資備蓄スペース、避難シェルター、さらにその下には動力部や環境・重力維持のための装置が備えられている。

地区

渋谷エリア

東京の渋谷を再現した繁華街。ファッションビル119 109など若者に人気の商業施設が立ち並ぶ。

世界情勢（後書き）

とりあえず、一通りの国的情勢を説明しました。なお、ブリタニア・ユニオン、人革連、AEUは冷戦状態ですが、アイランド・1は宇宙にある国家なので、戦場になる事はありません。

参戦作品

- 無敵ロボ トライダー G7
六神合体ゴッドマーズ
獣装機攻ダンクーガノヴァ
超重神グラヴィオンツヴィアイ
真（チエンジ！！）ゲッターロボ～世界最後の日
真マジンガー 衝撃！Ζ編
地球防衛企業ダイ・ガード
天元突破グレンラガン
劇場版 天元突破グレンラガン 紅蓮篇
トランسفォーマー アニメイテッド
- 新機動戦記ガンダムW（TV版）
機動戦士ガンダムOO 1st season
装甲騎兵ボトムズ
装甲騎兵ボトムズ ザ・ラスト・レッドショルダー
装甲騎兵ボトムズ レッドショルダードキュメント 野望のルーツ
- マクロスF
劇場版マクロスF ～イツワリノウタヒメ～
コードギアス 反逆のルルーシュ
交響詩篇エウレカセブン ポケットが虹でいっぱい
宇宙をかける少女
- バンプレストオリジナル

参戦作品（後書き）

今回はこの物語の参戦作品をご紹ひましたが、もしかしたら増える予定もあります。

「動き出す者達」（前書き）

スコート・ラボでテストパイロットに任命されたクロウ。しかし彼らが知らない所で動き始めた者たちもいた。これはその者達を描いた新たな物語である。

「動き出す者達」

（宇宙空間）

クリス「マイスター達のMS、すべての起動準備完了しました。」

ラッセ「OK、こっちも準備完了だ。」

フェルト「トレミーの調整も全て完了しました。」

イアン「しかしトレミーまで出しちまうとは…」

スメラギ「仕方ないわ、事態はそれだけ急を要することなのだから。」

クリス「全ての準備整いました。スメラギさん、お願いします。」
スメラギ「ええ、わかつたわクリス。これよりソレスタルビーイングは次の行動を開始します。マイスター達は直ちにガンダムに乗り込んで待機してください。トレミー、発進！！」

（エリア11 学園クラブハウス内）

ナナリー「それじゃあ、おやすみなさい、お兄様。」

ルルーシュ「ああ、お休み、ナナリー。」

そう言うとルルーシュという名の青年は、メイドの咲世子に妹のナナリーを任せ、2階の自室に戻つていった。

？？？「遅かつたな、妹との会話は済んだが、坊や。」

ルルーシュ「黙れ、魔女。ところでちゃんとカレン達には今度の作戦は伝えたのだろうな？C・C・？」

C・C・「ああ、ちゃんと伝えたぞ。」

ルルーシュ「よし、これで明日の計画は完璧だ。問題は…」

C・C・「今度こちらに来るスーパー口ボットの連中か。」

ルルーシュ「だが問題ない、俺にはこのギアスがあるからな…」

C・C・「なら精々頑張れよ、『ゼロ』よ。」

（日本 羽田国際空港）

赤木「お、ワツ太じゃねえか！」

ワツ太「あ、赤木さん！もう来てたんだ。」

赤木「まあな、あれ？専務達は来てないのか？」

ワツ太「ああ、専務達は別の仕事で今日は来れないんだ。」

赤木「じゃあ“竹尾ゼネラルカンパニー”はワツ太一人だけかよ？」

ワツ太「まあでも大丈夫さ。だって俺は社長だからな！」

いぶき「偉いわねワツ太は。赤木君もちょっと見習いなさいよ。」

青山「そうそう、いい大人なんだからな。」

赤木「んなもん言われなくてもわかつてるよ。なんせ俺達は“21世紀警備保障”の社員だからな！」

甲児「相変わらず元気ですね。」

赤木「よう、甲児！タケルも一緒か。」

甲児「はい、この間は色々お世話になりました。」

赤木「いやいや、いいのいいの。」

タケル「皆さん、そろそろ出発しないと。」

赤木「本当だ！やつべえ！」

いぶき「それじゃあ、行きましょうか。」

ワツ太「おー。」

タケル「・・・」

甲児「どうしたタケル？」

タケル「ちょっと気になる事があつてね…」

甲児「気になる事つて？」

タケル「いや、なんでもない。早く行こうか。」

甲児「おう！」

（ドラゴンズハイヴ）

田中「いや～、チームロの皆さん、お疲れ様です。今回もいい活躍で。」

葵「それはどうも…」

田中「皆さんお疲れでしょう、ゆっくり休んでください。明日は中

々の大仕事になりそうですから。」

くらら「明日もどこかの有利な勢力と戦うの?」

田中「それがダンクーガノヴァのやるべき事ですから。」

葵「それで、今度はどこに行つたらいいの?」

田中「エリアーーですね。」

朔哉「エリアーー、あそこって確か…」

ジヨニー「謎の怪人『ゼロ』率いる“黒の騎士団”の話で持ちきりになつてゐる島ですね。」

くらら「まさか黒の騎士団と戦えつて言つんじゃあ…」

田中「いえいえ、その逆です、皆わんには、ゼロの手助けをしてもらうのですよ。」

葵「あれ、でも今はゼロが優勢に立つてゐるんじゃあ?」

田中「どうやら今度の相手は、コーネリア率いるブリタニア・ユニオン軍のNMF・MSとPMCのレッディショルダーが協戦するらしいので。」

朔哉「常勝のコーネリアと一騎当千のレッディショルダーが相手とは…」

ジヨニー「それならゼロに加担する理由も納得ですね。」

葵「OK、わかつたわ。明日は今までにない刺激がありそうね。」

「早乙女研究所」

武蔵「しかし博士も無茶言つよなあ。まさかエリアーーで人暴れしてこことはよ。」

隼人「博士の話じゃあインベーダーがあの辺りに來てゐると言つていたらしいが…」

武蔵「んなことになつたら大惨事じゃねえか!」

隼人「おそらくNMFやMS・ATでは歯が立たんだろうな。」

竜馬「へつ、何処だらうが関係ねえ!インベーダーは俺達ゲッターチームがぶつ潰す!!!!」

武蔵「お、張り切つてゐな、竜馬。」

隼人「その張り切りが余計なトラブルを呼ばなきゃいいがな。」

「サンジエルマン城」

琉菜「じゃあ次にゼラバイアが現れるのは…」

ミズキ「ここ、エリア11みたいね。」

エイナ「こんな所でゼラバイアが現れたら大変ですよ！」

斗牙「此処はそんなに人が多いの？」

エイジ「それだけじゃねえ、ここには貴族や皇族なんかのお偉いさんがいるからな。その人達になんかあつたら国際問題になっちゃうぜ。」

リイル「それはまずいと思います…」

エイナ「そう言えばそこはゼロという人もいましたね。」

エイジ「いや、さすがに噂の怪人でもゼラバイアはキツイだろ。」

ミズキ「じゃ、やる事は一つね。」

斗牙「ああ、ゼラバイアは、僕達グラナンナッシュが討つ！」

そして、来るべき、5月15日
大きいなる戦いが始まる…

「動き出す者達」（後書き）

新シリーズのプロローグみたいなものです。

状況を説明しますと、ルルーシュがコネリアとフジ決戦をする前日です。

そこにガンダムやスーパー・ロボットが入つたらルルーシュが圧倒的に有利なので敵もたくさん入れてみたらかなりやばい事になつたかも・・・

「クロウ、ニアリーへ飛ぶ」（前書き）

少々待たせてしまつてすいません。今日から新シリーズです。まあ
まあ、おろくお付き合いください。

「クロウ、エリア11へ飛ぶ」

クロウ「最近よお、うちの嫁がさあ、もつと稼いで来いつてうるさいんだよ。俺もさあ、一生懸命頑張つてはいるんだけどなあ‥‥、不景気つて残酷だよなあ。よし! 今日は朝まで飲むぞー! ! ! オヤジ、がんもとこんにやくと‥‥」

たのである。

二十九
二十九

トライア・ホ・たく ハハ 二三所が多すぎてどうかは突き 辺めはいのかわかりやあしないよ（怒）」

クロウ な ナイスなツツコミで

「今から仕事をしてもいいんだか、わざわざ立ちなまへんか？」

クロウ「また次元獣退治か?」

トライア「あんたも“ゼロ”やその組織の事は知つてゐるだろ。」
クロウ「まあな。」

ゼロとは、前エリアー11総督であるクロヴィス殿下を暗殺し、エリアー11のブリタニア・ヨーロン軍と激戦を繰り広げているレジスタンス『黒の騎士団』の首領である。ただ、仮面とマントを被つているため、正体はおろか、性別なども不明なのである。

クロウ「なんだ、黒の騎士団の戦闘データでも撮つて来いっていう

トライア「いや、今回の仕事は黒の騎士団とは関わったりはしない

さ、ただ、一応注意はしておいた方がいいと思つてね。」

クロウ「？」

トライア「この間につそり手に入れた極秘情報なんだけど、黒の騎士団の所には今、口ロニーのガンダムとギルガメスの兵、おまけにダンクーガもいるらしいよ。」

クロウ「マジか!? エライ組み合わせじやあねえか。」

トライア「口ロニー解放を目的とする口ロニーのガンダム、有利な方の敵になるダンクーガ、そして傭兵部隊の陣営の一つであるギルガメスの兵、そしてエリアーの解放を目指す自称“正義の味方”の黒の騎士団…はつきり言つてどんでもない組み合わせや。」

クロウ「そんなメンバーと戦わされるブリタニア・ヨーロンも氣の毒に。」

トライア「そうでもないさ。あつちはあつちで常勝のコーネリアにレッドショルダーもいるらしいからね。」

クロウ「あ～、それだつたら納得。」

トライア「まあどつちにしてもかなりの被害が出るのは確かだね。」

クロウ「じゃあなんだ? もしかしてスーパー口ボットの手伝いか?」
今エリアーーではとある建物の建設のために、もう一つの日本から、有名な企業会社『竹尾ゼネラルカンパニー』や『21世紀警備保障』などが来る事になつてゐるのである。

クロウ「噂じやクラッシャー隊やマジンガーつて名前のスーパー口ボットまでいるつて話だ。だがそんぐらいだつたら俺必要か?」

トライア「違う違う、それでもなによ。」

クロウ「はあ、じゃあ何しに行くんだ俺は?」

トライア「実はね、これはまだあまり知られていないんだけど、エリアーーにソレスター口ビーアイングが向かつてゐるという情報が入つてゐるんだよ。」

クロウ「なんだつて!」

ソレスター口ビーアイングとは、すべての紛争に武力介入を行うという宣戦布告を宣言し、実際起動エレベーターのテロの撃退や内戦の制

圧も行つているらしいのである。

トライア「そこであんたにはソレスター・ビーリングの調査を行つてほしのさ。」

クロウ「えりこ無茶を言つてくれるが……だが、やるからにはきちんとやるが。」

トライア「報告楽しみにしてるよ。」

クロウ「ま、期待しないで待つてくれ。」

その翌日、クロウはブ拉斯タを乗せた小型船でエリア一人で向かって行つたのである。

「クロウ、エリア11へ飛ぶ」（後書き）

今回から新章突入です。

「正義、解放、刺激、傭兵」（前書き）

クロウがHリー11へ出向する前日、ある組織のある計画の最終確認が行われていた。

「正義、解放、刺激、傭兵」

→シンジユクゲットー 黒の騎士団アジト→

デュオ「えーと、おーいカレン、これは此処でいいのか？」

何かを確認するために訪ねたおさげ髪の少年は、コロニーから来た

ガンダムパイロットの一人、デュオである。

カレン「ああ、それは重要な物だから大切に扱つてよね。」

強気な発言をする赤髪の少女、カレンは、デュオにそう注意しながら作戦の準備に取り掛かっていた。

デュオ「所でよ、カレン、今回の作戦は大丈夫なのか？」

カレン「何よ急に…」

デュオ「いや確かにこの作戦はすごいが、失敗したら敵だけじゃなくて周りの町も被害が出るぞ？」

デュオが心配している作戦とは、敵を指定した位置までおびき寄せ、用意したサクラダイトの爆弾で山を爆発させ、土砂崩れを起こして敵の数を減らす。という作戦なのだが、その山の近くには町があり、失敗すれば大勢の民間人を巻き込みかねないのだ。

カトル「そうならないようにするのが今の僕たちの役目ですよ。」

金髪の青年、カトルが心配するデュオを慰める。

葵「そうそう、あたし達がしつかりしないとね、カレン。」

カレン「もちろんだとも。今の私達は正義の味方なんだ！民間人を巻き込んでたまるもんか。」

ダンクーガのパイロットである葵の励ましに、なおさら気合いが入るカレンだった。

デュオ「そう言えば他のメンバーは？」

カトル「ヒィロヒトロワは作戦地域の確認、扇さんや他の騎士団は機体の整備、ジョニーさんはゼロと作戦の内容確認をとっています。朔哉君とくらさんは町の様子を見に行っています。」

デュオ「OK。ってあれ、キリコは？」

カレン「キリコも自分の機体のチェックをしているよ。」

デュオ「まあ、AT乗りにとつてATは自身の棺桶みたいなもんだからな、ちゃんと見ておきたいんだな。」

彼らが話しているキリコという人物は、一週間前、ゼロと協力関係にあるアストラギウスの人間であるゴウト・バーラ・ココナがパドリングと呼ばれるAT・NMFの裏格闘技で使っていたAT乗りであるが、今は騎士団の戦力として活躍している。

デュオ「よし、準備完了だ。」

葵「こっちもOKよ。」

カレン「じゃあみんな、明日もよろしくね。」

そう言ってカレンを除く全員が部屋から退出していった。

カレン（明日は大切な戦いだ、絶対に負けるもんか…！）

そうして黒の騎士団とその協力者たちの夜は更けていった…

「正義、解放、刺激、傭兵」（後書き）

まずは黒の騎士団の戦闘前夜です。ちなみにタイトルについては、正義がコードギアス、解放がガンダムW、刺激がダンクーガノヴァ、傭兵がボトムズのイメージです。

「民間人の思い」（前書き）

運命の日、とある場所では、もう一つの日本から来たスーパー口ボット達が建設作業を行っていた。…

「民間人の思い」

トウキョウ疎開

甲児「赤木さん、これはこっちでいいんですね？」

赤木「ああ大丈夫だ。それとこれ運ぶの手伝ってくれ甲児。」

甲児「わかりました。」

建設材料を運んでいたのは、マジンガーと呼ばれるロボットに乗る少年、兜甲児と民間企業用として作られたスーパー・ロボット、ダイガードに乗っているサラリーマン、赤木俊介である。

ワッ太「赤木さん、こっち終わつたよー。」

赤木「サンキュー・ワッ太。じゃあこれ運び終えたら休憩タイムだ。」

ワッ太「ヤッター！じゃあ郁絵ちゃん達に知らせてくるね。」

赤木「よし、甲児、さつさと終わらせ……」

甲児「こつちはもう終わりました。」

赤木「早つ！－凄いな甲児、もうだいぶマジンガーを使いこなせるじゃないか。」

甲児「いや、まだまだだよ。もつとつまく扱えるように頑張らないと、お爺ちゃんも心配するから。」

彼の祖父、兜十蔵は、Dr・ヘルと呼ばれる男が率いる機械獣と鉄仮面軍団の戦いの中で、甲児にマジンガーノを託して亡くなつてしまつたのである。

赤木（爺さんを失つた時はだいぶ落ち込んでいたけど、もう大丈夫のようだな……）

ワッ太「赤木さん、甲児さん、おやつの用意が出来たよ。」

赤木「おっし、じゃあ休憩にしますか。」

甲児「はい。」

梅麻呂「郁絵くん、今日のおやつは何かね？」

郁絵「皆さんのお元気が出るどら焼きです。」

赤木「お、いいねえ。疲れた時は甘いもんが一番つてね。」

いぶき「もう、調子いいんだから。」

青山「ま、そこがそいつの取柄みたいなもんですからね。」

さやか「甲児君、お疲れさま、はいお茶。」

甲児「ああ、ありがとう、さやか」

一緒に休憩しているは竹尾ゼネラルカンパニーの社員、梅麻呂専務・郁絵・厚木・木下と、21世紀警備保障の社員でダイ・ガードのサブバイロットであるいぶき・青山、そしてマジンガーと同じ超合金でできたアフロダイアのバイロット、さやかである。

彼らは現在、合同作業として同じ仕事を手伝っているのである。ちなみに実はもう一人彼らの仕事を手伝っている人がいるのだが…

ワツ太「あれ、タケルさんは？」

甲児「あれ？さつきまでいたんだけど…」

郁絵「タケルさんなら向こうで休憩してましたよ。」

ワツ太「そつか。じゃあ俺タケルさんにどら焼き分けてくるよ。」

タケル「・・・・・」

ワツ太「タケルさん。」

タケル「ワツ太か、どうしたんだい？」

ワツ太「これ、どら焼きのおすそ分け。」

タケル「ああ、すまない。」

ワツ太「どうしたのタケルさん？なんか元気ないけど。」

タケル「・・・・・」

ワツ太「もしかして、ギシン星の人達が気になるの？」

ギシン星とは、超能力を使い地球侵略をたくらむ異星人の事である。この明神タケルも実はギシン星人で、彼は地球を破壊するために反陽子爆弾と共に送られてきたのである。だがタケル自身が地球を愛

して いたため、皆で 地球を 守る 事になつて いる のだ。

タケル「いや、そつちは今 のところの クラッシャー隊から問題ないとの 通信が 来て いる から 大丈夫だ。」

ワツ太「じゃあ 何で 悩んでるの?」

タケル「俺が 気になつて いる のは...」

甲児「エリア11にいる ゼロの 事だろ。」

タケル「赤木さん、それに 甲児も。すみません、心配をかけて...」

赤木「いいのいいの、ぶつちやけ 言うと 俺達も 気になつちゃってさ。」

ワツ太「赤木さん達も?」

甲児「ワツ太もかい?」

ワツ太「だつて 気になる ジやないか。同じ国の人間なんだし。」

赤木「そうだな...」

ワツ太「それに ゼロが どんな顔して いるのか 気になつて 気になつて。」

赤木「つて そつちかよ!」

ワツ太「え、違うの?」

甲児「タケルが 言いたいのは、俺達が ゼロと 戦うかも しれないってことさ。」

ワツ太「ええ!マジかよ!...」

タケル「今俺達が エリア11にいる以上、彼らと 関係ないことはないから...」

甲児「確かに彼らと 戦うのは ちょっと...かといつて 協力すれば 俺達も テロリスト 扱い されちまう しな。」

タケル「...」

甲児「...」

赤木「はいはい、辛氣臭い顔しない。まだ 仕事をしなくちゃならな いんだからな。」

タケル「... そうですね、早く 仕事を 終わらせましょ。」

ワツ太「ところで 赤木さん、次はどこで 作業するんですか?」

赤木「え~ つと 確か、ナリタだな。」

やつして彼らは運命によつて出で立つこととなる。
もう一つの日本の戦いに巻き込まれながら・・・

「民間人の思い」（後書き）

今回は日本組のお話です。彼らは今仕事でエリヤーーに来ていて、もうじきある戦いに巻き込まれていくのです。

「巻き込まれし運命（やだめ）」（前書き）

東京疎開の仕事を終えた赤木達は、次の作業現場であるナリタに向かっていた。

「巻き込まれし運命（やだめ）」

（ナリタ山脈付近）

甲児「今日の作業はどんな予定ですか？」

赤木「そうだな、この間のと同じで、建設作業の手伝いだな。」

ワツ太「それならすぐに終わりそうだな。」

移動する車の中でのんびりしている赤木達の所に、監督責任者である城田が話に入って来た。

城田「一様は仕事だ。ちゃんどしる。」

赤木「大丈夫ですよ城田さん。現場作業はいつも本気ですから。」

青山「そのやる気を机作業の方でも出してほしいもんだな・・・」

青山が皮肉な言葉を言った。

その時、赤木達が乗っていた車が止まってしまったのである。

赤木「あれ？もう着いたのか？」

タケル「いや、まだ目的地は先だけど？」

城田「ちょっと待て、私が様子を見に行つてくる。君達は此処で待機だ！」

そう言って城田が車を降りれば、車の前に歩道を封鎖していたブリタニア軍が何人もいたのである。

城田「すみません、何かあつたのですか？」

ブリタニア軍「何だお前は？誰の許可でここに来た！」

城田「失礼、私は城田、21世紀警備保障の責任者だ。なぜこの道を封鎖しているのですか？」

ブリタニア軍「ふん、あいにく民間人に教える事ではない、帰れ！」

部隊の隊長らしき人物に軽くあしらわれてしまつ。

その様子を赤木達はこつそり見ていた。

いぶき「なによあれ、感じワルう。」

ワツ太「ほんとだよ。何があつたかぐらい教えてくれたつていいじゃないか。」

タケル「まさか・・・」

メンバーが嫌悪している中、タケルだけは何か嫌な予感を感じていた。

城田「事情さえ話していただければ我々はすぐにここを去りますので。」

ブリタニア軍「黙れ！イレブン風情が生意氣な！..」

隊長の男は、顔を歪めてそう言い捨てた。

城田「イレブン…？ちょっと待つて下さい！何か勘違いされているようですが、我々は此処の国の者ではありません。」

ブリタニア軍「そんなこと知った事か！失せないのなら…」

男は懐から銃を取り出し、城田へ向けた。

赤木「城田さん！」

甲児「やめろ！相手は民間人だぞ！」

甲児たちが飛びかかるとしていたその時、

兵士「隊長～！」

遠くの方で部隊の人らしき人物が男を呼び出す。

ブリタニア軍「何だ？」

兵士「山頂の方から黒の騎士団が出現！それに日本解放戦線の兵士である藤堂鏡志郎と四聖剣も一緒です。」

ブリタニア軍「何だと…」

藤堂鏡志郎とは、7年前に起きた極東事変で唯一ブリタニアに泥を塗った日本軍人である。かつては日本解放戦線にいたが、どうやら今は黒の騎士団といつようだ。

兵士「それとヨーネリア殿からの伝言で、封鎖部隊の隊長達は直ちに本隊と合流するようだと。」

ブリタニア軍「ええい仕方ない！私と一部隊は本隊と合流し、殿下のもとに急ぐのだ！」

兵士「あのー、私は…？」

ブリタニア軍「全員が行つてどうするーおまえは此処で居残りだ！」

兵士「りょ、了解しましたー！」

隊長の男はそう言つて連絡した兵士を残して、自分の部隊全員で山奥に向かつて行つた。

赤木「ふう～、良かつた～。一時はどうなる事かと。」

甲児「大丈夫ですか、城田さん？」

城田「私は問題ない。だが…」

どうやら作業はできない状況であることを城田は悟つていた。

城田「各員は撤収準備！今日の仕事は中止だ！」

ワツ太「ありやま、今日は休業になつちやつたよ。」

梅麻呂「私達にとつては一大事！」

城田「現状が現状だ！やむを得まい。」

郁絵「城田さん、大変です！ナリタ上空で界震が！」

城田「何つ！こんな時にか。」

いぶき「ちょっとどうするのよ？」

木下「行くにしてもナリタは今、騎士団とブリタニア軍の戦闘地になつています…」

甲児「けどヘテロダインはNMFじゃあ倒せませんよ。」

彼らの言うとおり、ヘテロダインは、核^{コア}と呼ばれる心臓部分を壊さねば再生してしまつ怪物なのである。

赤木「だつたらやる事は一つ！俺達もナリタに向かつぞ！」

さやか「ええ～！」

城田「おい待て赤木！我々が言つたら邪魔になるだけだぞ…それに戦場では何が起こるかわからんぞ！」

赤木「その時は気合と根性でカバーだ！！！」

大声で叫ぶと、赤木は乗つっていた車を運転し、封鎖ゲートを破壊する。

赤木「いぶきさん、青山、早く行きますよ…」

いぶき「仕方がないわ、行くわよ、皆…」

青山「お、おい！冗談だろ！」

甲児「どうします、タケルさん。」

タケル「こうなつたら仕方がない、俺達も向かうぞ…」

城田「おい！ちょっと待て……」

城田が制止する前に、赤木達を乗せた車はそのままナリタへ向かつていた。

梅麻呂「ああ～、社長お～。」

木下「私達を置いてかないでえ～。」

兵士「ああ、なんて事を！俺が隊長に殺されるーー！」

城田「まったくあいつらは……、申し訳ありません。後できちんと謝罪いたしますので。」

詫びをし、城田と梅麻呂達は車を追いかけて行つた。

兵士「ど、どうしよう・・・・」

兵士が茫然とした様子でその場に立ちすくんでいた時、一本の電話が入つて來た。

兵士「はい、なんでしょう。」

ブリタニア軍「何をやつている！早くコーネリア殿下に伝えるのだ！」

兵士「へ、何をですか？」

ブリタニア軍「エリーアー11にソレスター・ビーリングと、所属不明の機体が幾つか入国したのだ！」

兵士「ええ――！」

「**参拝するおれし運命（やまとめ）**」（後醍醐天皇）

つこよナコタヒセテハシテれもした。此處からアノハシヒニニルシナキヤハ
が出ておれや。

緊急のお知らせ

只今、自分のPCがインターネットに繋がらなくなつたため、次の更新はしばらく未定になります。ご迷惑をおかけします。下座

いつ治るかは不明ですが、PCが使えるようになり次第、きちんと物語も進行しておきますので、どうかしばらくお待ちください。なお、感想やメッセージは何とか出来ますので、何かメッセージがあれば遠慮せずに言っちゃっても構いません。

この小説の続きを楽しみにしてらつしやる皆様方には大変ご迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。

「ナリタ戦線」（前書き）

ナリタ戦地で起きた界震の調査をするため戦場に乗り出す赤木達。一方、ナリタ攻略を行うために戦線に出たコーネリア達にも思わぬ朗報が飛び込んできたのだった：

「ナリタ戦線」

（ナリタ攻略戦 前線基地指令室）

「コーネリア「何つ！ソレスタルビ・イングが。」

ギルフォード「はい。それと未確認の機体もいくつかこちらに向かって来ているらしく」

「コーネリア「ええい、ただでさえ騎士団共に手を挙げているというのに！」

前線基地では、黒の騎士団との戦いの為に指揮をとっている第2皇女「コーネリア」がいつにもまして厳しい表情で情報を聞き出していた。コーネリア「ソレスタルビ・イングは、両方の勢力を潰すつもりなのか？」

ギルフォード「それはまだ分かりませんが、その可能性は高いと思われます。」

「コーネリア「くつ、各部隊隊長達とグラストンナイツ達に伝える！ソレスタルビ・イングの迎撃準備をさせるのだ！奴らにエリア11の地を踏ませるな！！」

ギルフォード「未確認の機体はいかがいたしましょう？」

「コーネリア「当然！無断で入るような狼藉者も排除しろ……」

リーマン「お待ち下さい、コーネリア閣下」

「コーネリアの命令に異議を唱えたのは、傭兵部隊「レッドショルダー」の最高司令官、リーマン将軍であった。

ギルフォード「貴様！姫様の命令に逆らうか！」

リーマン「そうではありません、未確認の機体の方は迎撃する必要はございません。」

「コーネリア「どういうことだ？」

リーマン「機体の正体は此方で既に調査済みです。まだ片方しかわかつていませんが、3機の飛行機らしき機体は「ゲッターロボ」と呼ばれているのです。」

ギルフォード「ゲッター？ 確か日本の早乙女博士が開発したという対インベーダー兵器ですか？」

リーマン「そうです。そして、奴らが来ているという事は、おそらく此方の方にインベーダーが来ているかもしません。」

コーネリア「何だと！ あの化け物までこひらに向かって来ているのか！？」

リーマン「そちらはまだ調査中ですが可能性は高いでしょう。そうなつたら下手に我々の部隊を入れるのは防衛ラインを崩してしまい、ゼロに隙を作つてしまつことになります。」

コーネリア「どの道不法侵入機も化け物も入れてしまつとこひらではないか！」

リーマン「ですがこの情報はまだこひらにしか入つておりません、そこで、彼らを騎士団のテリトリーまで誘導するのです。」

ギルフォード「なるほど、騎士団とゲッター、インベーダーをぶつけるという事ですね。」

コーネリア「ちよつと待て、ゼロがインベーダーなどにやられてしまつたら、本国に何と言えば？」

コーネリア「自身も騎士団とインベーダーの共倒れは別に構わないしむしろ大歓迎なのが、そしたらゼロ討伐の手柄を最悪ゲッターに奪われてしまいには人の手を借りないと反逆者一人も倒せない無能者として本国に扱われてしまう屈辱をコーネリアは我慢ならなかつたのである。」

リーマン「それなら」心配なく、向こうにも幾人か腕の立つ者が何人かいたようですし、ゼロがあれしきの連中で殺されることはないでしょう。インベーダーを倒すのに疲労した連中を叩くもよし、インベーダーに部下を殺され、独り身になつた所を拘束すればよし、やり方を考えれば、閣下に汚名を付けずに、成果を出せます。」

コーネリア「くつ…」

リーマン「彼らの誘導役は我々レッドショルダーが引き受けます。閣下の有能な騎士たちを低俗な化け物ごとに振るうのはもつ

たいないですから。」

コーネリア「……わかつた、インベーダー及びゲッターの誘導は貴様に任せる。」

リーマン「了解しました。では失礼します。」

そう言って、リーマンは指令室から去つて行った。

ギルフォード「よろしいのですか?」

コーネリア「いい訳ないだろう!だが、だからと言つて私の部下に化け物の相手までさせる必要はないからな。」

ギルフォード「姫様……」

コーネリア「それよりギルフォード、前線にいるダールトン将軍にも伝えろ、部隊の幾つかをゼロとの戦闘部隊とソレスタルビ・イングの討伐部隊に分ける。その後、騎士団をテリトリー内までに誘導するのだ。奴らを籠の鳥にするのだ!」

ギルフォード「イエス! ゴアハイネス。」

（前線基地ATT用倉庫）

リーマン「コニン少尉、準備は出来たか。」

コニン「はい将軍。既にインベーダー誘導部隊とソレスタルビ・イング・ゲッターの討伐部隊は出動しました。」

リーマン「よし、ではコニン少尉は裏道から回りゼロを監視しろ。絶対に気づかれるなよ。」

コニン「了解!」

コニンは急いで自分のATTに乗つて戦場に駆け向けて行った。

リーマン「どうやら、この戦い、思った以上の物が手に入りそうだな。」

不審な笑みを浮かべるリーマンの手には幾つかの書類がまとめられていた。

リーマン（元トッププレーサーの飛鷹葵にシユタットフルト家の令嬢、巣島の奇跡までいるか、だがここにからなうじつでもできる。問題はここからか……）

現在黒の騎士団と共にいる元ギルガメス兵、キリコ・キュービー
と…

ルルーシュ・ランペルージの情報書が入っていた

リーマン（ふふ、まさか死んだはずの皇子がまだいたとはな、おまけに王の力も手にしていたか…。ペールゼン閣下、どうやら貴方にはよい土産がありそうです。）

そう、彼は既にゼロの正体を知っていたのである。さらに彼は、ゼロが持つていてる不思議な力、ギアスの事も既に承知済みなのである。リーマン「キリコ、ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、貴様らの存在、この俺が確かめてやる！」

そして一つの陰謀が静かに動き始める。

「ナリタ戦線」（後書き）

今回はブリタニア軍サイドで御送りしました。
更新が遅れてしまい申し訳ありません。とりあえず今は友人のPC
を借りて更新させて頂いてます。前より遅くなるかもしれません
何とぞよろしくお願いします。

「遅れてきた借金まみれ」（前書き）

エリアー11で様々な思いや陰謀がひしめく中、クロウは貨物飛行船で戦場の地へと向かっていた。

「遅れてきた借金まみれ」

（ナリタ付近 上空）

クロウ「にしてもえらい状況だな、これは。」

飛行機を操縦しながら黒の騎士団とブリタニア軍との戦争の地となつているナリタの現状を見てクロウは睡然としていた。

所々で無残な残骸となり果ててている双方のNMF、水溜りのように溜まっている血の集まりには大量の兵士や騎士団の死体が転がつており、中には頭が粉碎しているものや、下半身が抉り取られた者もあつた。生き残っている者達も、NMFでの一方的な弾圧に命を落としたり仲間を失つたショックで正気を失つた者も沢山いたのである。

クロウ「こりやひでえ…どつちもただの殺し合いになつてやがる。」
そこでクロウにある疑問が浮かび上がる

クロウ「騎士団のゼロは今までこんなひどい被害を出してはいなかつたはずだ…だが今の現状は違つ。」

クロウの知つている限りでは、ゼロという人物は最小限の被害、あるいは首領や指揮官を潰して早めに戦闘を終息させるなど、余計な被害を出さないようにしている人なのだ。だが今の被害は最小という言葉では収まりきらないほどな事態となつてている。

クロウ「この状況にこの惨劇…まさか」

* * *『…らは…タ…』である。そち…所ぞ…を…たえる…』

クロウ「なんだ?えらく電波悪いな?」

酷いノイズが走つて聞き取りにくかつたが、どうやらブリタニア軍からの通信だつたようである。だが電波が悪いらしく、通信はすぐに切れてしまつ。

クロウ「なんか嫌な予感がするぜ、すぐに調べてみるか。」

「ナリタ山上付近」

ジョニー「ミサイルデトネイター……」

巨大な機体、ダンクーガノヴァのパイロットの一人であるジョニーが、腰に装着されていたミサイルを数発発射し、敵のブリタニア軍を迎撃する。

朔哉「しつかしよお、いくらなんでも敵多すぎないか？」

ジョニー「確かに、エリアーの兵力にしては数が多くなる。本国に増援を要請したのでしょうかね？」

くらり「これ以上相手にしていたら合体の制限時間が過ぎちゃうわよ……」

実は彼らが乗るダンクーガは一定時間を超えると機体がオーバーヒートしてしまうため、その前に合体を解除しないといけないのである。

葵「だつたらさつと終わらせるわよ……」

メインパイロットである葵が渴を入れる。

その直後、別の方で敵の相手をしていたカレンから連絡が入つて来た。

カレン『葵ー大変なのよ……』

葵「どうしたのカレン？」

カレン『ゼロが……ゼロが……』

葵「ちょっと落ち着いて。ゼロがどうかしたの？」

カレン『ゼロが何処にもいないのよー通信もできないし……』

朔哉「まさかやられたんじゃあ……」

葵「そこー！縁起でもない事言わないのー！カレン、そっちの敵を倒したらポイント2013で合流しましょ。私達も探すの手伝うから。」

カレン『わかつたわ。気を付けてね、葵。』

葵「OK。」

通信を切つた後、葵達は改めて気合を入れ直す。

「ああ、あれじゃあやつらと敵倒して、ゼロ探してばっさり

「ああ、あれじゃあやつらと敵倒して、ゼロ探してばっさり

「ああ、あれじゃあやつらと敵倒して、ゼロ探してばっさり

「遅れてきた借金まみれ」（後書き）

クロウさん、久々の登場です。戦場はかなり混乱している状況になっています。戦場の状態の伝え方が解りにくかったら「めんなさい」

「策略家ｖｓ傭兵部隊隊長」（前書き）

ゼロと連絡が取れなくなり、混乱する前線の黒の騎士団。実はそれには、ある訳があったのだつた。」

「策略家 v/s 傭兵部隊隊長」

（ナリタ山中 樹海）

ルルーシュ「くつ、失態だ…」

苦虫を潰したような顔をする黒の騎士団首領、ゼロもといルルーシュ。実は先程、彼はコーン曹長と名乗るレッドショルダーの戦闘員と奮闘していたのである。もつとも、彼はNMFの操縦は人並みなので、プロの傭兵であるコーンとはマトモに殺り合えば、確実に自分がやられる可能性が高いので、今この樹海を利用して追手を振りきつた所なのである。

ルルーシュ（まさか伏兵が近くにいたとは…、一刻も早くカレン達と合流しなければ…）

黒の騎士団は連日勝利を取つてはいるが、それはルルーシュの戦略とカレン達などの協力者が一緒にいてやつと得た勝利である。なのでそのどちらかが抜けてしまえば、コーネリアやレッドショルダーなどには確実に全滅させられてしまう恐れがあるので。

ルルーシュ「何とか動けば…ぐつ！」

ルルーシュが乗つている無頼改はコーンの襲撃によってかなりダメージを受けてしまい、動けるかどうかも怪しい状態だったのである。さらにルルーシュ自身も、襲撃のショックで左肩とギアスを憑依させている左目を負傷してしまったのである。

敵に遭遇する前に自分の陣営と合流しようとしていたルルーシュだったが、不運にも、敵に見つかってしまったのである。

ルルーシュ「しまった！もう見つかったか！しかもあれは…」

どうやら運悪くレッドショルダーらしきATに見つかってしまったのである。肩の形式が他のATと違うところを見て、どうやら隊長機らしい。

ルルーシュ「…？、なぜだ、なぜ襲つてこない？」

何故か敵のATはじつと無頼改を見ながら立ち止まつていた。

すると突如、向こうから通信が入つて来たのである。

ルルーシュ「通信だと!? あいつ、どうにうつもりだ?」

リーマン「そのNMF、乗っているのはゼロ、いやルルーシュ・ヴ

イ・ブリタニアだな。」

ルルーシュ「何つ！」

突然敵に自分の本名を聞かれ、ルルーシュは驚いた。

リーマン「伊達に戦乱のヒリアーーーを生き抜いてきた訳ではないよ
うだな。コーンや他の隊員達はまく撒けても、この俺はそう簡単
には行かんぞ！」

ルルーシュ（まさか俺の生存に気付いていた者がいたのか…！？）
リーマン「私はレッドショルダー前線指揮官、リーマン將軍である
！ルルーシュ・ヴィ・ブリタニア、貴様の王の力、どれほどのもの
かこの私が確かめてやる！」

は辟ナられんか
！

自分の生存やギアスの事まで知られている以上、ルルーシュ自身も無視するわけにはいかず、多少の無理は覚悟の上で敵の司令官と戦う事を決意する。

エリアー11の樹海で、指揮官同士の戦いが始まったのである。

「策略家 v/s 傭兵部隊隊長」（後書き）

ルルーシュ対リーマンとの戦闘開始です。表現の仕方がおかしかつたら遠慮せずに報告してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0585v/>

スーパーロボット大戦 the ZEXIS

2011年10月10日11時52分発行